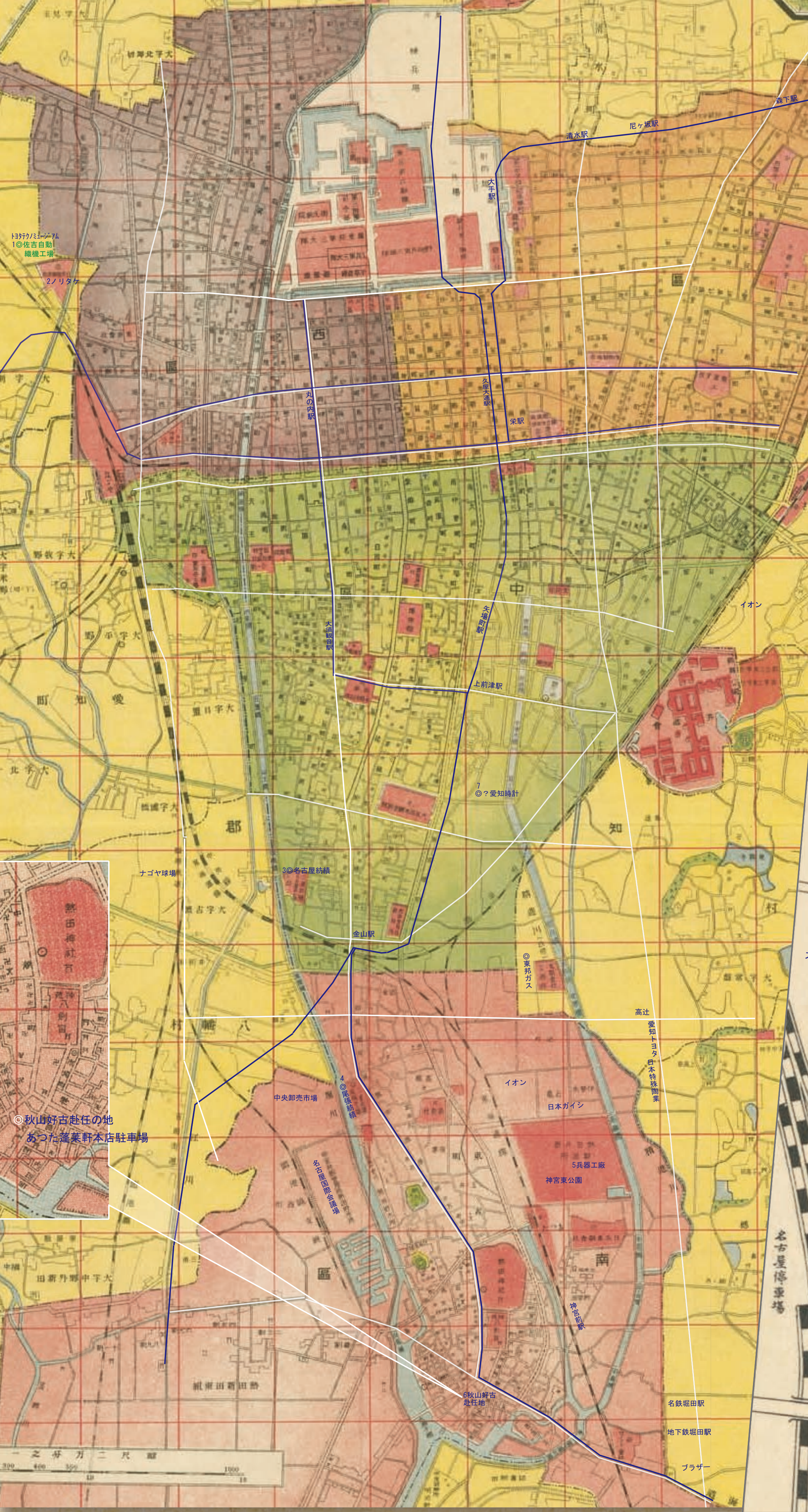
がんばれ名古屋商人！

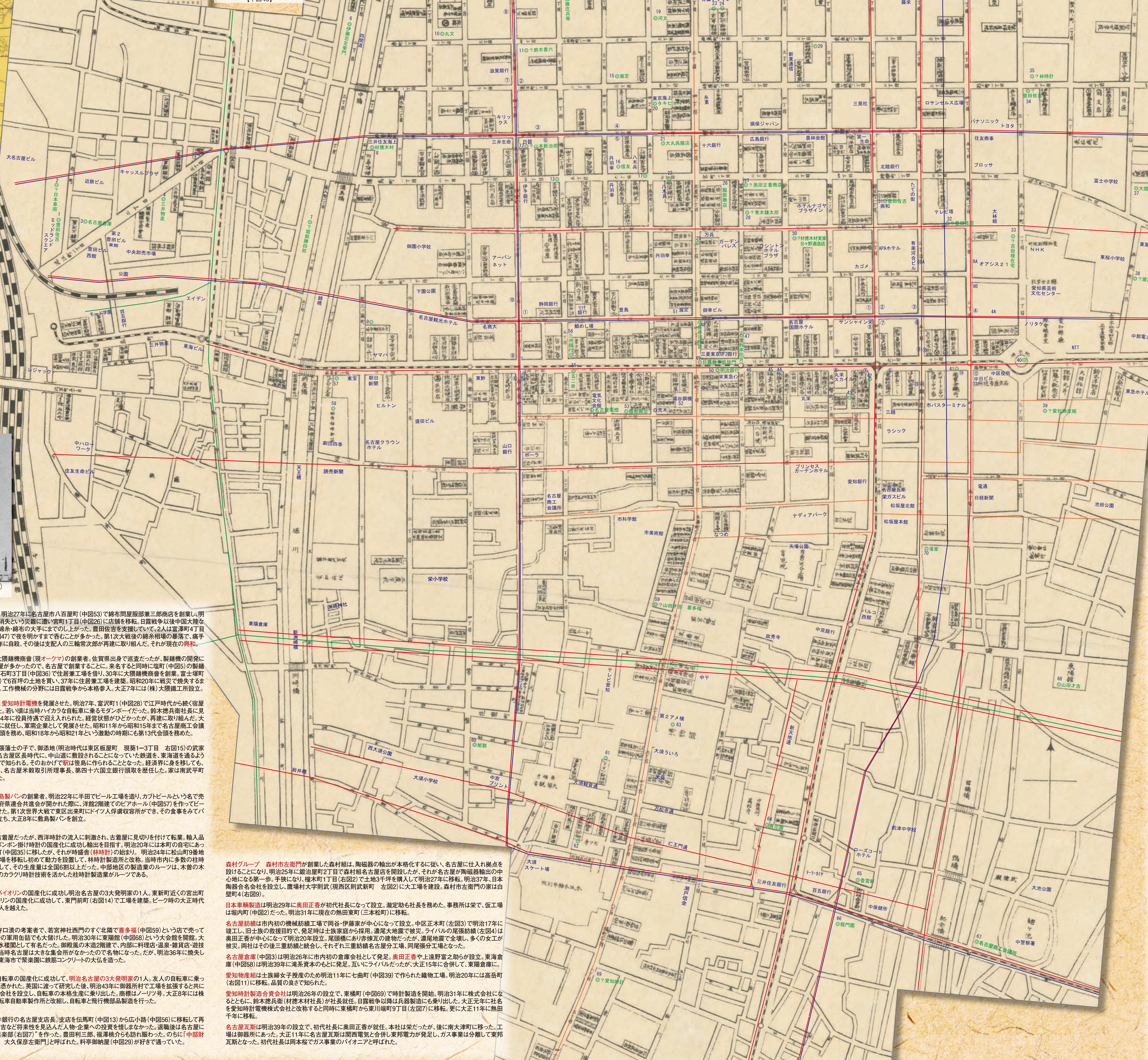
明治時代版

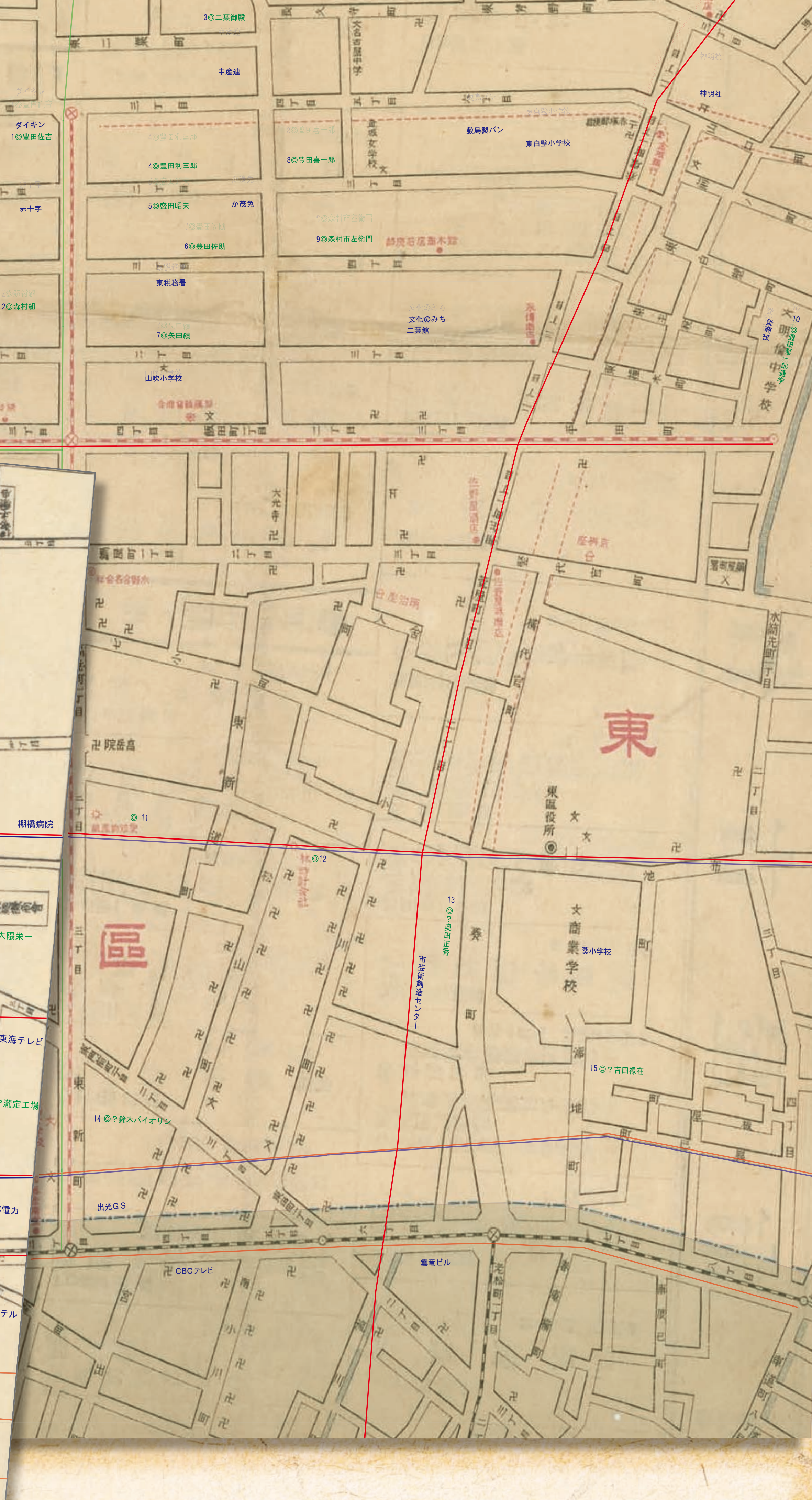
左図「府県聯合共進會記念　名古屋現勢地圖」（明治43年名古屋新聞社發行）　中図「名古屋市中央部営業案内地圖」（明治42年編輯兼發行者三共社守谷耕策）　右図「名古屋樞要地圖」（大正3年扶桑新聞社發行）

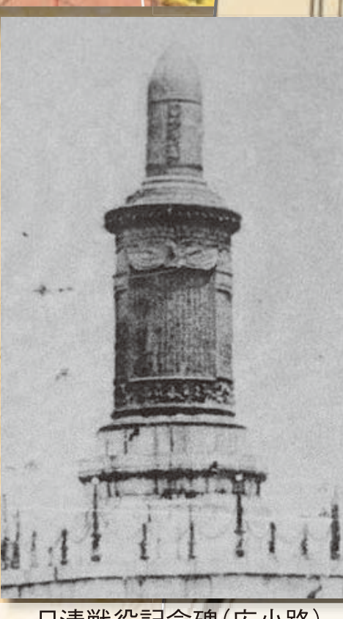
左図および中図は、地図記載の明治時代の施設・会社が黒文字になっていた。著者が記載したのは青文字もしくは緑文字である。場所を特定できなかった場合は、その周辺にあるという意味で「?」と記した。
右図は、地図記載の大正時代の施設・会社が赤文字になっていた。著者が記載したのは青文字もしくは緑文字である。



日露戦争凱旋門（広小路本町）
【中図49】






日清戦役記念碑（広小路）
【中図40】

豊田佐吉は慶応3年生まれだから、明治の元号と同じ年齢になる。明治27年に名古屋に出てきて、朝日町1丁目12（中図31）で糸繰返機の製造販売を行う「豊田代理店伊藤商店」を創業したが、その場所は錦3丁目6（興和本社）の近辺。翌28年に寶（宝）町3丁目66（中図32）に移転したが、その場所はテレビ塔のあるブロックの南側近辺だと推定される。そこで信じていた伊藤氏が相場で失敗して、佐吉もとばっちりを受けた。豊田商店に改称して自ら経営を始めた。明治30年に武平町3丁目15（中図34）に移転して、300坪の工場で動力織機の製造販売を始めたが、その場所は東区泉1丁目のトヨタビルの道を隔てて東側。明治38年に西区島崎町で織機製作工場を新設したが、それが現在のミッドランドスクエア（中図1）である。大正元年に西区則武新町で豊田自働織布工場（豊田紡織の前身）を設立したが、それが現産業技術記念館である。事業に成功した後に建てた家（右図1）は東区白壁1-17で、現在ダイキン工業になっている場所。

トヨタ自動車の創業者・喜一郎は、佐吉の長男として明治27年湖西市で生まれた。発明に熱中する佐吉に愛想を尽かした妻「たみ」は、喜一郎を生んで実家に戻ってしまった。喜一郎が3歳の時、佐吉は名古屋に家を構え、再婚した。だから幼少時の居住地は武平町3丁目15（中図34）ということになる。高岳尋常小学校（現東桜小学校）、旧制明倫中学（現県立明和高校　当時と場所が異なり現在の県立商業高校　右図10）で学んだ。大正元年、明倫中学の4年生の頃、喜一郎は上級学校への進学を望んだが、高等教育にあまり期待と関心を持たない佐吉との間で葛藤があった。建設中だった栄生工場（左図1）の現場に何度も足を運び「父のこの工場さえうまくいったなら」と祈っていたという。その後東大工学部へと進学した。成人してからの家は右図8だった。なお、豊田自動織機製作所の初代社長・利三郎（右図4）は、喜一郎の異母妹「愛子」の婿。その利三郎邸の向がソニーの盛田昭夫氏（右図5）だった。

松坂屋の伊藤次郎左衛門家は慶応2年、祐昌（すけまさ）が14代次郎左衛門を襲名。祐昌は明治11年に名古屋博物館長（中図63）に就任。14年には名古屋商法会議所の初代会頭に就任。同年伊藤銀行を設立。43年には（株）いとう呉服店を設立し、子の祐民（すけたみ）が社長に就任。茶屋町（中図18）から出て、栄町（現丸栄スカイル　昔の名古屋市役所の跡地　中図42）で名古屋初の本格的なデパートをオープン。現本店の南大津通に移転したのは大正14年。

岡谷鋼機の岡谷家（中図52）は、9代目惣助が幕末から明治にかけて活躍。慶応3年に家督相続し、金属類の需要増大を予測し、古銅材などを在庫し、安定供給する体制を作り上げたことが維新時に利益を生む礎になった。明治4年に愛知七宝会社を設立し、ウイーン万国博に出品するなど世界に七宝焼を輸出し、貿易の先駆者になった。伊藤祐民は、この9代目惣助の娘ていと結婚。伊藤家と岡谷家は婚姻関係にあった。

奥田正香は、明治時代の中部財界の巨頭で“名古屋の渋沢栄一”と呼ばれた。尾張藩士の子として鍋屋上野村（千種区茶屋ケ坂公園）で誕生。名古屋に戻って宮町（中図27）で奥田商店を開き味噌醤油の販売を始めて成功。明治26年に名古屋商業会議所の会頭になり、大正2年までその座にいた。明治銀行を明治29年に設立して頭取就任。日本車輌製造を設立して初代社長に就任。名古屋証券取引所（中図43）の理事長に就任。福寿生命（右図45）も設立。だが、熱田伝馬町にあった遊郭を、稲永新田に移す計画で疑獄事件に巻き込まれて公職を下り、葵町（右図13）の本宅を去り、覚王山で仏門に入った。女将おたいが経営していた料亭魚半（百春楼　中図23）がお気に入りで、清元長唄はもちろん義太夫まで語った。明治32年に名古屋初の自家用車（蒸気自動車）を持っていた。

滝兵右衛門商店（現タキヒヨー）は、4代目兵右衛門が明治8年に本町（中図20）に土地を購入して名古屋進出。4代目は明治15年に名古屋銀行（中図17）を設立して初代頭取に就任。同銀行が取り付け騒ぎに遭った際には私財を投じて責任を果たした。明治45年に（株）滝兵商店を設立して、初代社長に5代目の信四郎が就任。南鍛冶屋町2に2千坪の豪邸（中図70）があり、池あり滝ありで、鶴まで飼われていた。

瀧定は、初代の定助が元治元年から東万町に住み、呉服太物卸商を営み始めた。慶応3年、2代目の滝兵右衛門から財産分与を受けて独立。明治22年に製造部門として西新町に絹定職工場（中図38）を開設。明治39年に東海倉庫（中図58　その後名古屋倉庫と合併して現東陽倉庫に）の設立に尽力。初代は明治36年に死去し、長男が2代目定助になった。2代目は明治39年に瀧定合資会社を設立。本店は東万町3丁目（中図15）。現本社所在地（中図51）に移ったのは昭和11年のこと。

材摠木材の創業の地は（中図8）で、針屋町（中図30）の酒造業・日比野茂兵衛の長男だった茂三郎を、養女のぶ（名エン青木新四郎の次女）の婿養子に迎え、彼が明治8年に8代目鈴木摠兵衛になった。7代目は上前津の別荘龍門園（中図66）に隠居。8代目は明治31年に愛知時計電機を設立すると同時に社長就任。関与した会社は、日本車輛製造、愛知木材、名古屋倉庫、名古屋瓦斯など数え切れない。名古屋市会議長も務めた。奥田正香の後を受けて大正2年に名古屋商業会議所の会頭に就任。

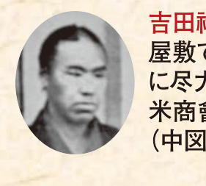
「日本の電力王」と呼ばれる福澤桃介は、慶応義塾の先輩である矢田績に招かれ、名古屋電燈（中図54）の株を明治42年に買い占めて名古屋に乗り込んだ。名古屋ホテル（中図9）で矢田績・下出民義らと協議しての行動だった。名古屋電燈は士族が中心になって設立した公共事業で、桃介はこの経営陣と対立。桃介が推進した名古屋電燈と名古屋電力の合併は、東陽館（中図68）を会場にして議論したが決裂して警官も出動した。桃介は辞任して名古屋を後にした。桃介はその後復帰し社長に就任してダム建設に邁進。大井発電所は本格的な発電所で、安価な電力を供給できるようになり中部地区のインフラ整備に貢献した。東邦電力（現中部電力）、東邦瓦斯、愛知電気鉄道（現名古屋鉄道）などの経営にも貢献。大同特殊鋼などの一流企業を次々に設立。後年は川上貞奴と同居し、夫婦同然の生活であった。「二葉御殿」（右図3）を建てる前は、1人の時は名古屋ホテルで、貞奴と一緒の時は秋琴楼（中図44）もしくは上園町の丸文（中図10）で泊まった。

川上貞奴（さだやっこ）は、日本の女優第1号。若い頃は芸妓で、伊藤博文に寵愛された。夫の川上音二郎が死去した後は、昔の恋人だった福澤桃介と夫婦同然の間柄に。大曽根に輸出向け最上級の絹を生産販売する「川上絹布株式会社」を設立して自ら経営。「二葉御殿」は、桃介と貞奴が共に暮らした家。創建当時は、文化のみちエリアの北端、東二葉町にあり、2千坪を超える敷地に建てられ、和洋折衷の建物は名古屋財界に入れない外様派が集結して「二葉御殿」と呼ばれてサロンになった。この建物は移築復元工事が行われ、現在文化のみち二葉館になっている。

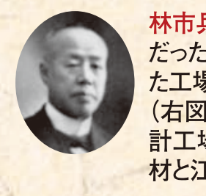
服部兼三郎は、明治27年に名古屋市八百屋町（中図53）で綿布問屋服部兼三郎商店を創業し、明治34年に店舗消失という災難に遭い宮町1丁目（中図26）に店舗を移転。日露戦争以後中国大陸などに進出して、綿糸・綿布の大手にまでのし上がった。豊田佐吉を支援していて、2人は富澤町4丁目の「花月」（中図47）で夜を明かすまで呑むことが多かった。第1次大戦後の綿糸相場の暴落で、痛手を受け、大正9年に自殺。その後は支配人の三輪常次郎が再建に取り組んだ。それが現在の興和。

大隈栄一は、大隈麺機商會（現オークマ）の創業者。佐賀県出身で巡査だったが、製麺機の開発に成功し、うどん屋が多かったので、名古屋で創業することに。来名すると同時に塩町（中図5）の製麺業者を訪れた。石町3丁目（中図36）で住居兼工場を借り、30年に大隈麺機商會を創業。富士塚町3丁目（中図37）で6百坪の土地を買い、37年に住居兼工場を建築。昭和20年に戦災で焼失するまで、そこで居住。工作機械の分野には日露戦争から本格参入。大正7年には（株）大隈鐵工所設立。

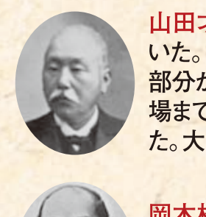
青木鎌太郎は、愛知時計電機を発展させた。明治7年、富沢町1（中図28）で江戸時代から続く宿屋の家に生まれた。若い頃は当時ハイカラな自転車に乗るモダンボーイだった。鈴木摠兵衛社長に見込まれて明治34年に役員待遇で迎え入れられた。経営状態がひどかったが、再建に取り組んだ。大正15年に社長に就任し、軍需企業として発展させた。昭和11年から昭和15年まで名古屋商工会議所の第11代会頭を務め、昭和18年から昭和21年という激動の時期にも第13代会頭を務めた。


吉田禄在は尾張藩士の子で、御添地（明治時代は東区板屋町　現葵1ー3丁目　右図15）の武家屋敷で誕生。名古屋区長時代に、中山道に敷設されることになっていた鉄道を、東海道を通るように尽力したことで知られる。そのおかげで駅は笹島に作られることとなった。経済界に身を移しても、米商會所頭取、名古屋米穀取引所理事長、第四十六国立銀行頭取を歴任した。家は南武平町（中図33）だった。

盛田善平は敷島製パンの創業者。明治22年に半田でビール工場を造り、カブトビールという名で売り出した。関西府県連合共進会が開かれた際に、洋館2階建てのビアホール（中図57）を作ってビール党を堪能させた。第1次世界大戦で東区出来町にドイツ人俘虜収容所ができ、その食事をみてパン製造を思い立ち、大正8年に敷島製パンを創立。


林市兵衛は、古着屋だったが、西洋時計の流入に刺激され、古着屋に見切りを付けて転業。輸入品だった米国のボンボン掛け時計の国産化に成功し輸出を目指す。明治20年には本町の自宅にあった工場を杉ノ町（中図35）に移したが、それが時盛舎（林時計）の始まり。 明治24年に松山町9番地（右図12）に工場を移転し初めて動力を設置して、林時計製造所と改称。当時市内に多数の柱時計工場が誕生して、その生産量は全国6割以上だった。中部地区の製造業のルーツは、木曽の木材と江戸時代のカラクリ時計技術を活かした柱時計製造業がルーツである。

鈴木政吉は、バイオリンの国産化に成功し明治名古屋の3大発明家の1人。東新町近くの宮出町で誕生。バイオリンの国産化に成功して、東門前町（右図14）で工場を建築。ピーク時の大正時代は、従業員1千人を越えた。


山田才吉は、守口漬の考案者で、若宮神社西門のすぐ北隣で喜多福（中図59）という店で売っていた。日露戦争の軍用缶詰でも大儲けした。明治30年に東陽館（中図68）という大会館を開館。大部分が池で山水楼閣として有名だった。御殿風の木造2階建で、内部に料理店・温泉・雑貨店・遊技場まであった。当時名古屋は大きな集会所がなかったので名物になった。だが、明治36年に焼失した。大正4年に東海市で聚楽園に鉄筋コンクリートの大仏を造った。

岡本松造は、自転車の国産化に成功して、明治名古屋の3大発明家の1人。友人の自転車に乗って面白さに取り憑かれた。英国に渡って研究した後、明治43年に御器所村で工場を拡張すると共に岡本兄弟合資会社を設立し、自転車の本格生産に乗り出した。商標はノーリツ号。大正8年には株式会社岡本自転車自動車製作所と改組し、自転車と飛行機部品製造を行った。

矢田績は、三井銀行の名古屋支店長。支店を伝馬町（中図13）から広小路（中図56）に移転して再建した。豊田佐吉など将来性を見込んだ人物・企業への投資を惜しまなかった。退職後は名古屋に戻り“橦木町倶楽部（右図7）”を作った。豊田利三郎、福澤桃介らも訪れ賑わった。のちに「中部財界のご意見番　大久保彦左衛門」と呼ばれた。料亭御納屋（中図29）が好きで通っていた。

森村グループ　森村市左衛門が創業した森村組は、陶磁器の輸出が本格化するに従い、名古屋に仕入れ拠点を設けることになり、明治25年に鍛治屋町2丁目で森村組名古屋店を開設したが、それが名古屋が陶磁器輸出の中心地になる第一歩。手狭になり、橦木町1丁目（右図2）で土地3千坪を購入して明治27年に移転。明治37年、日本陶器合名会社を設立し、鷹場村大字則武（現西区則武新町　左図2）に大工場を建設。森村市左衛門の家は白壁町4（右図9）。

日本車輌製造は明治29年に奥田正香が初代社長になって設立。瀧定助も社長を務めた。事務所は栄で、仮工場は堀内町（中図2）だった。明治31年に現在の熱田東町（三本松町）に移転。

名古屋紡績は市内初の機械紡績工場で岡谷・伊藤家が中心になって設立。中区正木町（左図3）で明治17年に竣工し、旧士族の救援目的で、発足時は士族家庭から採用。濃尾大地震で被災。ライバルの尾張紡績（左図4）は奥田正香が中心になって明治20年設立。尾頭橋にあり赤煉瓦の建物だったが、濃尾地震で全壊し、多くの女工が被災。両社はその後三重紡績と統合し、それぞれ三重紡績名古屋分工場、同尾張分工場となった。

名古屋倉庫（中図3）は明治26年に市内初の倉庫会社として発足。奥田正香や上遠野富之助らが設立。東海倉庫（中図58）は明治39年に滝系資本のもとに発足。互いにライバルだったが、大正15年に合併して、東陽倉庫に。

愛知物産組は士族婦女子授産のため明治11年に七曲町（中図39）で作られた織物工場。明治20年には高岳町（右図11）に移転。品質の良さで知られた。

愛知時計製造合資会社は明治26年の設立で、東橘町（中図69）で時計製造を開始。明治31年に株式会社になるとともに、鈴木摠兵衛（材摠木材社長）が社長就任。日露戦争以降は兵器製造にも乗り出した。大正元年に社名を愛知時計電機株式会社と改称すると同時に東橘町から東川端町9丁目（左図7）に移転。更に大正11年に熱田千年に移転。

名古屋瓦斯は明治39年の設立で、初代社長に奥田正香が就任。本社は栄だったが、後に南大津町に移った。工場は御器所にあった。大正11年に名古屋瓦斯は関西電気と合併し東邦電力が発足し、ガス事業は分離して東邦瓦斯となった。初代社長は岡本桜でガス事業のパイオニアと呼ばれた。

名古屋駅は明治19年に笹島で開業。辺りは葦が茂る寂しい沼地だった。当時はなまって「笹島ステンション」と呼ばれた。明治22年に東海道線が全線開通。笹島駅前には旅館志那忠があり、乃木大将が泊まり「信忠閣」と筆を取った。昭和12年に現在の名古屋駅の場所に移転。

中央線は明治33年に笹島ー多治見間で開通して千種駅が開業。中央線は明治44年に全線開通。

名古屋市内の路面電車は明治31年に笹島ー久屋町間で開通。日本車輌製造の製品だった。

「坂の上の雲」の主人公の1人・秋山好古は明治9年、18歳の時に熱田区宮宿「南部赤本陣」跡に作られた義校「千竈学校」校長として赴任。その学校跡地は、あつた蓬莱軒の駐車場付近（左図6）。義校とは民間の寄付金で設立された初等学校で学制制定後は小学校になる。

凱旋門（中図49）は日露戦争を記念したもので、徳川義礼の書で「凱旋門」と書かれていた。名古屋城の第3師団は明治39年に凱旋。

日清戦争の戦役記念碑（高さ22㍍、砲弾スタイル　中図40）があった。大正9年に覚王山に移された。

鶴舞公園は明治42年開園。明治43年に関西府県連合共進会の会場になり360万人が入場。豊田佐吉は功労賞状を受けた。1等賞は檜長押（鈴木摠兵衛）、白木綿（服部兼三郎）、絹綿朝日織（愛知物産組）、陶磁器（日本陶器）、ビオラ（鈴木政吉）、茶（横井半三郎）らが入選。

郵便局と電信局が一緒になった名古屋郵便電信局（中図46）は明治20年に完成。煉瓦造2階建だったが濃尾大地震で全壊。市内電話は明治31年に通じた。

長谷川時計台（旧東海銀行本店の西べりの北角　中図48）は明治10年にできたもので、本町のシンボル。良い音色で時を報じた。

名古屋商法会議所は明治14年の創立で、明治18年に商工会議所に改組し、更に明治24年に商業会議所に改組。場所は桑名町の加藤庄兵衛（中図14）という味噌屋の一部を間借りしていたが、明治29年に栄町7丁目で会館（中図41）を建築した。大正10年に大池町（中図67）に移転するまで同所にあった。明治時代の会頭は次の通り。初代＝伊藤次郎左衛門（14年～18年　いとう呉服店　中図18）、第2代＝山本新治郎（18年～21年　酒問屋商　中図12）、第3代＝鈴木善六（21年～24年　味噌溜製造業　中図11）、第4代＝堀部勝四郎（24年～24年　生鯖商　中図7）、第5代＝鈴木善六（24年～26年　中図11）、第6代＝奥田正香（26年～大正2年　味噌溜製造業等　中図27）。
なお、栄町時代の本館は、現在建中寺徳興殿になっている。

第2回愛知県物産博覧会は明治11年に愛知県博物館（中図63）で開催。同博物館は、明治44年に愛知県商品陳列館として生まれ変わった。商品や参考物品の陳列、製品の販売、商工業の調査を行った。

愛知県五二会陳列館（中図55）は織物・陶磁器・銅器・漆器・製紙の5つに敷物と雑貨の2種を加えた同業者団体・五二会が明治40年に開設した。代表は岡谷惣助。山田才吉も主要メンバー。

名古屋株式取引所（名古屋証券取引所の前身　中図43）は明治26年に南伊勢町で設立し、27年から売買開始。初代理事長は奥田正香。

大須観音の近くで明治9年に遊郭が公認され「旭郭」となった。若松町（中図60）、花園町に多数の席貸茶屋が並んで、最盛期には妓楼105軒、娼妓318人に達した。特に金波楼の金吾は天下の3名妓と讃えられ、西園寺公望の寵愛を受けた。旭郭は明治36年に大火に見舞われた。大正13年に中村に移転。また萬松寺の横には菊細工の黄花園（中図64）があり人気だった。

明治時代の一流料亭は、河文（中図19）のほか、大又、魚半（百春楼　中図23）、近直（中図24）、御納屋（中図29）、川喜が代表的なところで、俗に魚の棚通と呼ばれたところにあった。また大衆的な店としては東鮓本店、宮房（中図62）、八千久（中図61）も人気があった。

河文は財界人の集まり「九日会」の会場。メンバーは伊藤次郎左衛門、岡谷惣助、鈴木摠兵衛、滝兵右衛門、瀧定助、神野金之助、富田重助など。

秋琴楼（中図44）は伊藤博文、板垣退助などが常宿に。明治16年に尾崎行雄らの演説会を妨害する事件が起きた。

上前津の料亭香雪軒（中図65）は明治10年に開業。政財界の大物を乗せた二頭立ての馬車が毎夜のように止まった。女将のかな子は美貌で、桂太郎首相の妻に。

名古屋ホテル（中図9）は明治25年に開業した名古屋初の洋式ホテル。江戸川乱歩らが訪れた。昭和30年代まで営業を続けた。

明治32年に中京新報が人気投票を実施。料理屋では東陽館（中図68）が1位、魚半が2位になった。旅館では秋琴楼が1位、名古屋ホテルが2位、上園町の丸文（中図10）が3位になった。もっとも中京新報の山田才吉は東陽館の経営者でもあるので信憑性はやや疑問？

御園座は長谷川太兵衛が創業し、明治30年の開場。こけらおとし興行は初代市川左團次。明治38年には川上貞奴が初登場、魅了した。

名古屋銀行（中図17）は東海銀行の前身の1つで明治15年設立。初代頭取は滝兵右衛門。その後、瀧定助、恒川小三郎が頭取を務めて発展させた。主に郡部出身の商人から支持された。同じ伝馬町には三井銀行名古屋支店（中図13）も明治9年にできていて、金融機関が並ぶ名古屋のウオールストリートだった。この伝馬町通を境にして、俗に、北側をカミ、南側をシモと呼んだ。

愛知銀行（中図25）は東海銀行の前身の1つで明治29年設立。初代頭取は岡谷惣助。日銀出身の渡辺義郎が明治42年より30年余にわたって頭取を務めて発展させた。主に尾張藩御用達の商人から支持された。

明治銀行（中図22）は明治29年に奥田正香が中心になって設立されたが、その後で広小路（中図50）に移転した。生駒重彦が頭取を務めて発展させた。主に外来派の商人に支持された。昭和7年に取り付け騒ぎで休業に追い込まれた。

伊藤銀行（中図18）は東海銀行の前身の1つで明治14年設立。

電気文化会館のある場所は、中部電力の前身である名古屋電燈（中図54）の発祥の地。明治22年に電力供給を始めた。大須の遊郭が主な顧客。

三井物産（中図4）は、大正元年に手形偽造事件が起きて大事件になった。

四間道にある伊藤家（中図6）は、伊藤忠左衛門家と呼ばれ、清洲越の商家。東海銀行の伊藤喜一郎氏がその出身。

陸軍省の東京砲兵工廠熱田兵器製作所（左図5）は明治37年にできた。鉄船、弾薬車、架橋器材等を製造した。

本町通は昭和3年に天皇陛下が行幸されたのを記念して御幸通と改名された。御幸ビルという名前はその名残か。

発行元：（株）北見式賃金研究所　社会保険労務士法人北見事務所　北見昌朗　http://www.tingin.jp/
　　　　名古屋の旧町名を復活させる有志の会　発足！　http://www.fukkatu-nagoya.com をご覧下さい。
著　書：「愛知千年企業　江戸時代編ー幕末を生き抜いた名古屋商人に学ぶー」（中日新聞社 平成 23 年発売）
　　　　「同　明治時代編」（発売予定）

非売品